



市長エッセー No.68

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、今年はお盆の帰省や夏休み中の家族旅行などを控えている方も多いと思います。新型コロナはいまだ収束の気配を見せず、国内では、過去最多の感染者を記録している自治体もあります。県内でも連日のように感染者が報告され、7月31日には茨城版コロナNextがステージ2からステージ3に引き上げられました。特に、高齢者の皆さんには、外出時に今まで以上の注意をお願いします。

そこで、例年9月に地区ごとで開催していた敬老会の式典を、残念ではありますが、見合わせることにしました(3ページ参照)。

ただしその代わりとして、「鹿嶋市長寿祝い膳応援事業」と銘打ち、75歳以上の方が市内の飲食店でお食事を楽しめるように食事券をお送りします。同時に、飲食事業者の皆さんにも元気を取り戻してほしいという思いも込めた事業です。

9月上旬には「お食事券」が届きますので、おいしい食事とともに、ご家族、ご友人で長寿をお祝いしてください。



▲8月1日、ひまわり畑でNPO法人かしま遊休地活用クラブの皆さんと

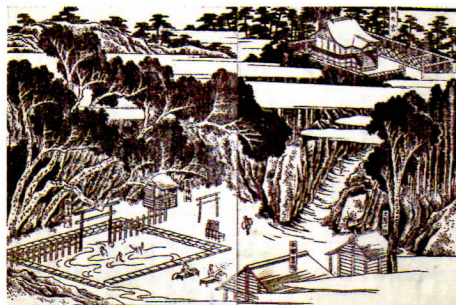
Doki Doki ~鹿嶋の文化財~ セレクション

NO.19

鹿嶋神宮にあったお寺

日本では仏教伝来以降、神と仏を調和させ同一視する思想が生まれました。皆さんは一時期、鹿嶋神宮境内にお寺が存在したのを知っていますか。

もともと鉢形地区にあった神宮寺というお寺が、建久5年(1194年)から延宝5年(1677年)の間、現在の鹿園の場所に建てられていました。そのほかに、神宮寺の西側に護国堂、御手洗池の近くには御手洗寺(涼泉寺)などがありましたが、明治時代になると神仏判然令が出され、全国的に神仏の分離が行われました。



▲江戸時代の御手洗池付近の絵図(『鹿嶋志』(文政六年)より) ※右下の大黒社と描かれているのが御手洗寺(涼泉寺)

鹿嶋神宮では寛文7年(1667年)に大宮司鹿島則教が神仏分離を唱え、延宝5年、神宮寺などは鹿嶋神宮境内の外に遷されました。今でも鹿園付近には土塁が残り、神宮寺の面影をみることができます。

鹿嶋の文化財が紹介されている「鹿嶋デジタル博物館」は、こちら→ <http://kashimashi.info/bunkazai/>

2020.8.15

古川博士の気象コラム



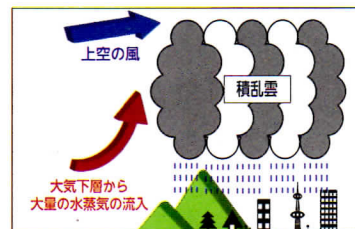
古川 武彦…理学博士。元気象庁予報課長、札幌管区気象台長。退官後に「気象コンパス」を立ち上げ、気象の啓発活動などを行う。

この春以来、鹿嶋でもコロナ対策で花火大会や海水浴場、夏祭りなどが中止となり、気軽な外出も難しい日々が続いていますが、鹿嶋神宮では「疫病平定」を願って「大助人形」が飾られました。早い収束を願うばかりです。

さて先月、九州に大きな被害をもたらした豪雨は「令和2年7月豪雨」と命名されました。この豪雨は、延べ2週間も日本周辺に居座った梅雨前線に沿って生まれた「線状降水帯」によるものです。

梅雨前線は、日本の南海上で発達する「小笠原高気圧」の西縁を時計回りに巡る南風と、日本海方面の高気圧からの北風が押し合い形成されます。带状に南北100km程度、東西1000km程度にもなる梅雨前線に沿って、高さが1万mにも達する積乱雲が集団的または散在します。このとき積乱雲は、次々と発生し1時間程度で消滅。これが繰り返されます。

今回の線状降水帯は、梅雨前線に流れ込む非常に湿潤な南西風が上昇して、積乱雲が次々に生まれ、線状に並んで形成されたもので、九州北部などに豪雨をもたらしました。これから台風の季節を迎えますので、皆さんもコロナ禍の防災の備えをしておきましょう。



▲次々生まれる積乱雲が上空の風に流され、線上に並び「線状降水帯」になる。